

神戸・六甲山麓における地場石材・御影石の石垣の形成と展開*

A Study on the Formation of the Stone Wall by the Use of Local Stone of Mt Rokko and Kobe

三宅 正弘**

By Masahiro MIYAKE

This thesis studies the formation process of the stone wall landscape of foothill residential of Mt Rokko and Kobe. And stonewalls were built on the suburban residential. This landscape is characteristic landscape. The foot of mountain, a town of stonewalls has been built and most of these stones are local product. Stones unearthed by construction works have been used for them. That is so-called "Mikageishi(granite)". As you may see from the geographical name of Mikage, Mt. Rokko is a well-known district for granite. I also consider the formation of the landscape by the use of local stone.

1 はじめに

神戸・六甲山麓地域においては、地場石材・御影石による石垣が固有の地域景観を形成している。斜面地という地域特性が法面や擁壁にそれを必要としたが、その形成は、明治末からの郊外住宅地としての需要が増してきたそれ以降に本格化してくる。住宅地という形態がわが国では、塀や垣を必要として、先の擁壁等と相まって、そこに近隣で調達できる地場石材を使っていくこととなる。住宅地開発前夜にも山麓の集落に積まれることがあったが、その景観が広域的に広がるものではなかった。本稿では、明治末から本格化していく山麓開発において地場石材がいかに使われていったかを明らかにしていく。

これに関連した研究についてはこれまで次の3点の視点から既報¹⁾で明らかにした。①その明治末からの住宅地開発、その初期における地場石材の活用実態について、②明治末から昭和30年代にかけて行われた開発地における地場石材による石垣の実態について、③現存する石垣の保全に関する視点などである。

そこで、本論では、それらを踏まえた総論であり、明治末から今日までの地場石材を使用した石垣建設システムの流れを把握し、そしてそのシステムの展開の可能性を考えるものである。

2 土木史における民間工事の石垣の位置づけ

まず土木史における本論で扱う題材の位置づけを行いたい。これまで土木史については、土木事業というものの自体が主に公共工事であったことから、その扱う題材も、

公共事業による構造物であった。逆に、建築史においては、公共事業とともに民間事業等と対象も広がるが、研究対象が建築空間に限られる。本論の対象となる石垣は、主に民間開発・公共開発にともに用いられたが、建築建物ではないことから建築史で扱われることも少なかった。また土木史においても民間事業の研究も少なかった。しかし、石垣は、土木工事でもあり土木史のなかで扱う必要性があると思われる。さらにわが国の蓄積された固有の技術であり、今日においては近自然工法や風土の視点からもその技術のニーズは高まりつつあることから石垣研究の意義があると思われる。

石垣の研究については、近世城郭研究などによって技法技術の研究はあるが、その後、近現代における技術に関する纏まったものは少ない。本研究の地場石材の視点は、これから将来の地域性豊かな景観形成という観点もあり、そこからは技法とともに石材の流通システムをも明確にすることが要される。それゆえに、本論では特に、石材という視点にも主眼をおいている。

3 住宅地開発と地場石材の関係

既報でも明らかにしたが、明治38年神戸・六甲山麓においての開発の嚆矢となった阿部元太郎による住吉村観音林（現在神戸市東灘区）が、当時この住吉村から全国に搬出されていた御影石（御影は近隣の港の名前でありそれが名称についた）の採石場近くであり、観音林の開発にも、造成時に地中から出土した石材を造成に使い、また大阪港築港用にも搬出した。

*keyword : 石垣 民間事業 地場石材 リサイクル

**正会員 工博 徳島大学工学部建設工学科

(〒770-8506 徳島市南常三島2-1)

同時代の開発地は、他に明治 44 年、中村伊三郎による苦楽園（現在西宮市）も採石場もしくはそれに近接する立地であった。宅地開発と石材事業の一体化は、当時において一般的傾向であったと思われる。例えば大正 8 年の甲陽園開発（現在西宮市）にあたった甲陽土地株式会社の事業では、「住宅地経営」と「石材事業」がセットになって開発されている。

さらに、昭和になり住宅地開発と石材供給との組み合わせが、住宅地設計システムに組み込まれたのが、昭和 4 年、株式会社六麓荘による六麓荘（現在芦屋市）の住宅地開発（個人施工の土地区画整理）である。ここでは、住宅地造成地にあたり地区内に 10 箇所の石材工場をつくり巨石は砕石し石垣やコンクリートのバラスに使った。石材は、敷地を囲む石垣に連続して使い、また庭石などの敷地の意匠に活用した。六麓荘は明治末からの六甲山麓の住宅地開発における地場石材活用システムの一つの到達点と評価できる。今日一般化した大型機械での造成ではない、人力での造成の終焉期の作品である。また造園と土木工事が一体となってシステム化していたと考えられよう。それは健康地として位置づけられた宅地規模も 200 坪から 300 坪中心であったことと無関係ではない。

地場石材御影石の産業自体も、大正 12 年前後がピークを迎えている。産業の主体は記念碑など加工石材であるが、土木工事用の採石場もあり、石材業の発展期と同時代にこうした初期の住宅地開発が行われていた。

昭和初期における山麓部における開発地は、上記のような比較的敷地規模の大きいものの一方で、電鉄会社や土地会社による宅地規模 100 坪を主体としたグリッドパターン分譲地が形成されてきたが、その多くは、小河川の河川改修に伴うものであり、そこでは河川改修から出土する玉石が主体に玉石積みとなっている。先の健康地開発のものが、崩れ積みや野面積みなどが主体であるのとは対照的である。比較すると玉石の方が、規格化に近い仕事となる。

こうした住宅地造成にあたり、それにより出土した石材をリサイクルして一体的に擁壁や石垣に整備するシステムが採用されたのは、六甲山麓部では昭和 37 年の宝松苑住宅地（宝塚市）が最後である。

このように住宅地造成に、地場石材が活用されることはそれ以降なくなる。昭和 40 年代からの山麓部の宅地開発はより大規模化そして機械化されていくなかで擁壁に用いられる石材も、県内他所産地の流通石材が採用されるようになる。大規模化した需要に地場石材は対応できなかっただろう。そして六甲山麓の御影石の採石も昭和 30 年代で終えている。しかし、その一方で、昭和 40 年代に行った神戸市による公共事業・鶴甲団地においては、地場石材と考えられる間知石によって擁壁が整備されている。これはそれ以前の開発地ではみられないものであり、現場で出土した石材かは定かでなくその実態は把握できていない。それまでのリサイクル型地場石材の擁壁は、出土した自然形状の野面積みが一般的であった。

4 むすび 戦後の展開と市民活動としての石積み

以上のように纏まった宅地開発の造成を主体に述べたが、当然個別の敷地レベルで地場石材が使われたものもある、しかし、昭和 30 年代以降は、採石もなくなり、地場石材が石垣に使われるのは、大規模敷地の個別宅地のみであり、その活用も年々減少している。出土した石材を敷地内でストックできる大規模宅地でないと、出土石材は処分される。

最後に近年の動向を示したい。石材産地として産業は昭和 30 年代に終え、土木事業として地場石材を専門に扱う業者はいない。しかし、その一方で新たな試みも始まっている。神戸市住吉山田地区では、平成 14 年から、建設現場から出土する石材をリサイクルする市民活動を始めている。今後、周辺地区では大規模宅地の更新などが予想されており、その市民活動の展開が期待される。



写真 1 昭和初期の六麓荘造成現場（写真提供細野組）

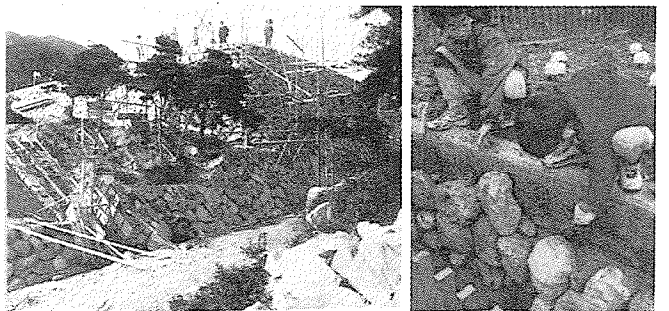


写真 2 六麓荘造成時（写真提供細野組） 写真 3 市民活動 2003

補注

1) 三宅正弘・鳴海邦碩、戦前前期郊外住宅地開発における山林地の住宅地設計の特徴に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 32, pp. 295-300, 1997. 三宅正弘・鳴海邦碩、地場場石材による石垣景観の形成とその特性維持に関する基礎的考察、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 31, pp. 193-198, 1996. 三宅正弘『石の街並みと地域デザイン—地域資源の再発見—』、学芸出版社、2001.